

第4回

新宿区次世代育成協議会部会

平成25年1月18日（金）

新宿区子ども家庭部子ども家庭課

○福富部会長

今日が最後の部会になります。3月に開かれる協議会で提言案を部会として提示し、そこで最終的な審議をいただいた上で、区長に提言をお渡しするということになります。

したがって、皆さんに大変ぎりぎりになって申しわけありませんでしたが、案をお送りしました。限られた部会の中でいろいろな御意見をいただきながら、うまくまとめ切れなかった反省もあります。未完成の部分が多いのですが御意見をいただいて、再度修正してもう一度皆さんにフィードバックする形で、文書のやりとりを進めたいと思っております。今日はできるだけ御意見を多く、どんなことでも構いません、いただければと思います。

それでは、「はじめに」から私が読みながら進めます。

「「ニート」や「ひきこもり」は、若者の抱える困難の一例であり、現在の社会状況では若者の誰もが困難を抱える可能性があります。そのため、若者本人だけの責任とするのではなく、区でも困難を抱えた若者が社会への一歩を踏み出せるように支援していく必要があります。」。

この文章と後の文章では文体が違っています。「はじめに」は「ですます調」という形で、後のほうはかなり「である調」になっています。

「平成22年度の第三期新宿区次世代育成協議会・部会では、「地域における若者への支援策をさぐる」をテーマに掲げ、「ニート」や「ひきこもり」など社会生活を円滑に営む上での困難を有する子ども・若者を支援するに当たっての課題の抽出及び整理を行いました。

平成23年度の第四期一年目の部会においては、引き続き若者支援をテーマとし、社会生活を円滑に営む上での困難を有する若者とその家族の立場に向けての事業等の必要性および周知の徹底や、より良い支援を行うための関係機関によるネットワークづくりなど、具体的な施策について議論を重ねました。

その中で、困難を有する若者への支援は、ともすると「就労自立」の数値のみが目ざされて、その数値の改善策・対応策に追われることが少なくないことが指摘されました。さらに、「就労自立」に至るには、若者の抱える内面の問題を解決するための支援が必要であり、そうした支援は決して直ぐに結果が出るものではなく時間がかかる、ということが議論されました。こうした議論を通して、内面の問題は若者になってから現れるものではなく、幼い頃からの予防的な対応が重要であるとの結論に至りました。

そこで、今年度の第四期二年目の部会においては、「生きる力を育てる子どもの居場所の機能充実～自立した若者の育成のために～」をテーマに掲げ、児童館、学童クラブ、そして放課後子どもひろばという「子どもの居場所」について、現状と課題を踏まえた運営の

仕方等についてさらに検討・議論するとともに、いわゆる困難を抱えた若者にならないために、問題を乗り越えられる子どもとして育つには、行政としてどのような予防策を講じることが可能かについて議論を重ねました。

以上のような部会での検討を踏まえ、予防策としての若者支援策に関する考えを提言として取りまとめ、今後の区の実践の中で生かしていただくよう具申します。」

ということです。

○福富部会長

文中、家族の立場に向けての「立場」は要らない。家族に向けてでいいですね。

○委員

第3段落中「その数値の改善策・対応策に追われることが少なくない」について、意味は分かりますが、数値のみですか、それとも数値の性急な改善ということなのでしょうか。

○福富部会長

ここで言いたかったことは、就労自立をどうしたらいいのかということを考えるために、実際にどのくらい若者が就労したのか、就労率はどうなのかとか、そういう数値だけにどうもこだわり過ぎて、それを上げるための施策に終始しているのではないかと。だからもっと前の予防的な問題とか、そういう背景的なことに少し目が向かなかつたのではないだろうか。それで、今年は背景を見ましようということにつながったのです。読み取れませんか。

○委員

改善したり対応したりするのは悪くないけれども、そのみが悪かったということですか。

○福富部会長

それだけに終始・先行し、精いっぱいだったので、もう少し目配りがあってもいいということですか。

○委員

就労自立の改善策・対応策であれば良いのですが、その数値となっていますから、やはり数字を上げることにのみ専念してしまったということですね。

○福富部会長

伝わりにくいですね。

○委員

数値の2文字をかぎ括弧でくくって目立つようにすることでどうですか。

○福富部会長

そうですね。数値を上げることは悪くないと思いますが、それだけでなく、もう少しあっていいのではないかと思います。

他にないでしょうか。ここは今までの経緯と、そしてこれから何をということですか。

次に、提言4からの流れということで、平成23年度の提言4の中で、「若者が困難を有する前の予防的な支援の充実・強化」として、四角に囲まれているところが前の提言でなされていた。それをそのまま引用したものです。それを受けて平成24年度のテーマは「生きる力を育てる子ども居場所の機能充実～自立した若者の育成のために～」として、実際に、数値だけではなくて、子どもたちからの対応が必要であろうということで、子どもの居場所をめぐる現状と課題として、3つの提言をまとめてみたということです。

提言の1番目は、子どもの「生きる力」を育む居場所の機能をもっと充実しましょう。2番目は、区民への周知の充実・強化、そして地域への発信。これもそれぞれの場所、学童クラブにしる、放課後子どもひろばの開放・運営にしる、地域の方々に十分周知がなされているようであり、誤解も少なくない。もっときちんとした発信をしましょうということ。3番目は、そういう自立した若者を育てるための、具体的にどんなことが考えられるかということ。きっかけづくり。

そして、前書きとして、「子どもの居場所をめぐる現状と課題」の文章があります。

「行政が運営する子どもの居場所には、主に、「児童館」、「学童クラブ」及び「放課後子どもひろば」がある。

そこで、これら3つの居場所について整理してみる。

「児童館」は、児童福祉法に基づき、0歳から18歳未満の児童及びその保護者を対象に、指導員を配置し、行事など様々なメニューを用意している空間である。

「学童クラブ」は、児童福祉法に基づき、小学1年生から3年生までを基本に、就労等で日中に保護者がいない児童を対象とした、あくまでも家庭の代わり、保育、養護の場である。新宿区では、児童館併設が多いが、小学校内で実施している学童クラブもある。

「放課後子どもひろば」は、区の事業実施要綱に基づいて運営されており、小学1年生から6年生までを対象として、小学校施設の空き教室や校庭を実施場所としている。そして、子どもたちの自主的で自由な遊びの空間の提供及び安全の担保を目的として、見守りスタッフが配置されている。区では、平成19年度から順次開設し、平成23年度から全小学校で実施となった。

ところで、子どもたちにとって「居場所」はなぜ必要なのだろうか。そしてそこにどのようなことが求められているのだろうか。

区は、平成24年度に、区立小学校1年生から6年生及びその保護者を対象とした放課後子どもひろばのアンケートを実施した。その結果、子どもたちは、自由に時間を使って、好きな場所で好きなことができる「自由な遊び空間」を求めていることが浮き彫りにされた。一方で、保護者は、子どもたちを自由に遊ばせたいが、きちんと管理され、安全が確保された上での遊び場を求めている。遊び（場）についての子どもの意識と保護者（大

人)の意識とが必ずしも対応していないことが注目される。

子どもたちにとって、他者と関わりながら生きるということは、社会性を身につけていく上で極めて重要なことである。特に、異年齢集団、異世代あるいは異文化の人々との関わりが果たす役割は大きい。自分と異質な人と関わることによって、自分自身を見つめることを余儀なくさせ、他者に対する思いやり等を育む場となるからである。

他者とかかわることで、子どもは成長し、社会性を身につけていく。特に異年齢集団の中で、子どもは、自分自身で考えて自分で判断する。そして自分の中で様々なことを克服する、自分で起こしたことは自分で責任を負うという「生きる力」の一つを身につけていくのである。

行政、地域、そして保護者を含めて、大人は子どもたちに、この「生きる力」を育めるような環境をどう設定し、将来、社会生活を営む上で困難を有する若者にならないための手段を講じていけるのかを考える必要がある。」。

これは、極めて大きなというか、決意表明ですね。これでいいですね。

ここで何かありますか、お気づきのこと。よろしいでしょうか。

そして、提言1、2、3という3つが以下にあります。子ども総合センター所長に、あえて申し上げなければいけないと思うんですけども、実際に所長の立場は、ここでこれから議論する放課後子どもひろばを実際に統括するというか、それに関わっている。管理する立場の責任者ですね。これからの提言の中に、そういう立場の者にとっては、かなり厳しい言い方もなされていますが、これはあえて案として載せています。

皆さんの御意見、議論の中で一致するならば、ここは少し自由に変えてみたい箇所は幾つかあります。ただ、最初から聞くのではなくて、少し思い切ったことをぶつけてみようという意図で、少し厳しい文言が幾つかあります。

それでは、提言1です。子どもの「生きる力」を育む居場所の機能充実。

「子どもたちが困難を有する若者にならないための予防的視点から、先ず、子どもの居場所を十分に機能させる手立てを考える必要がある。

行政は、これまで、子どもたちの居場所のうち、児童館と学童クラブについて、幅広い年齢層の子どもたちが一定の空間で楽しく過ごせるように、安全で管理が行き届いた施設に整備し、設備や遊具等を充実させてきた。その結果、これら2つの居場所は、遊びがかなり構造化され、非常に管理されている状況となった。そこには、何か事がある毎に責任を問う親側の姿勢とそれに対処しようとする行政側、管理者側の意識の呼応が見られる。その結果、何か事がある毎にルール変更や禁止ということで安全を保つという方向性が繰り返されることとなった。こうした負の連鎖は、ともすると、自ら安全を創造する努力や工夫する能力を子どもたちから奪ってしまいかねない。

「自由」と「安全・管理」という面で、先ほどのアンケートの結果は、子どもたちの意識と保護者（大人）たちの考えとが必ずしも同じでないことを示している。しかし、子どもが「自由に遊びたい」と言っても、全ての制約を取り払い、安全な管理の下で子どもたちを危険から守りたいという、保護者（大人）の意向を全く無視することはできない。両者の折り合いをどうつけるかが重要な課題となる。

行政の自由裁量の幅が広く、運営について工夫の余地がある放課後子どもひろばは、こうした課題に行政が対処できる一つの間になりうる。そのために行政は、放課後子どもひろばの運営の中で、多様な方策を試行錯誤的に試みる必要があるが、現在、十分に機能しているとはいえない。保護者や地域側に、児童館や学童クラブと放課後子どもひろばを同一視する誤解もある。これを受けて行政側も、大人の立場から遊びを構造化し、指導しようとする姿勢を強めてしまい、結果的に前述した負の連鎖の再現となりかねない。

放課後子どもひろばが、「生きる力」に結びつくような、自ら安全を創造する努力や工夫をする能力を育てる場として機能するためには、子どもにとって「遊び」の持つ意義を改めて見直す必要がある。安全が予め確保された場で、準備され整えられて提供された「遊び」を通して、自ら安全を創造する努力や工夫をする能力を育てることは難しい。子どもたちが、自分たちの「安全」を自分たちで作出そうとするためには、「安全」のためのルール作りへの参加が欠かせない。空間そのものの物理的安全性の確保は子どもだけでは無理としても、「遊び」の内容に関しては可能であろう。その際に、学年的にも文化的にも多様な子どもたちのかかわりが有効と思われる。こうした子どもたちの活動を、大人がどこまで見守れるかが大人に問われることになる。」。

ここで、負の連鎖だとか、ルールや禁止ということで、非常にネガティブな表現で、書き方が強められているんですけども、この提言1全体を通して何かございますでしょうか。子ども総合センター所長から、後ほど御意見をいただきたいと思います。

○委員

表現の部分で、第4段落の3行目「多様な方策を試行錯誤的に試みること」には、二重表現的な感じを受けます。試行錯誤自体が、いわゆるトライアル・アンド・エラーということなので、これ自体が試行するという意味合いですよね。例えば危険が危ないという表現に近いような。

○福富部会長

どことどこがですか。

○委員

試行錯誤的に試みるというよりも、試行錯誤することが必要であると。

○福富部会長

試行錯誤的に試みるという言い方はおかしいですか。何か決めて、決めたことを試みるというやり方と、いろいろなことを仮にやってみるという場合、ということを見ると、試行錯誤的な行為、試みというのは、言葉的にあり得えますよね。危険の何とかとは違うと思いますけれども。試行錯誤的な試みと言いますよね。

○委員

試行錯誤するという動詞形で使う場合が多いかなと思いますが。

○福富部会長

試行錯誤するというのは動詞形を使いますよね。でも試行錯誤的という言い方をすると…

○委員

試みるということと、試行錯誤の試行自体が試みて行うということなので、試行すると試みるというのは二重表現になっています。試行錯誤の試行自体が、試行というのは試しに行うという意味ですね。

○福富部会長

そうすると、試行錯誤的な試みというのはだめということになりますね。

○委員

この場合には動詞形に使っているのです。

○福富部会長

いや、試行錯誤的に試みるだから、試行錯誤的試みという言葉自身が二重表現だという御意見ですね。

○委員

私自身はそういう使い方はしないという意味です。

○福富部会長

そうすると、試行錯誤的試みに対比するのが、例えば一方的な試み、例えば断定的な試みというように2つありませんか。

○委員

断定的に試みるという表現ですか。

○福富部会長

試行錯誤というのは幾つかのことをやってはだめ、やってはだめというような試みをする。それを試行錯誤的という一つの形容詞的なことであり得るのではないかと思います。

○委員

2段落目の4行目についてですが、「遊びがかなり構造化され、非常に管理されている状況となった。」は、分かるようで分からない。例えば、学童クラブの保護者の立場から言うと、子どもたちはどんどん入れ替わっていきます。ですから、その中で構造化されていると

しても、子どもたちがどのように育っているかということが一番注目する点なんです。

だからこれだと、例えば同じような集団遊びをやっているとして、それが非常に管理されている状況というのがよく分からない。後でも言われているように、集団遊びの中でお互いの関係だとか、ぶつかり合いだとかを通じて、これ以上やるとけがをすとか、そういうことを学ぶということは十分あるわけですね。だからそれが、一見すると同じようなことをやっているように見えても、個々の子どもにとってみると、小学1年生、2年生、3年生と成長して、その中の役割が変わっているはずなんです。だから、それがなされていないという意味なら分かりますが、ただ構造化して管理されているというのが、集団遊びとかそういう児童館や学童クラブのメンバーが入った遊びだとすれば、何か疑問が生じます。遊びがなされなくなってきたというのはある。乱暴な遊びは嫌いだ、させないでという、保護者で例えば一輪車は危ないから禁止だとか、そんなことはかなり広がっている気がしますが、遊びがちゃんと適正になされていて、それが余りよくないというふうには余り思えません。

そして、放課後子どもひろばはどうかというと、これも大人の立場から遊びを構造化し、指導しようとする姿勢を強めてしまうと書いてありますが、実際に私たちに聞こえてくるのは、管理で精いっぱい遊びを集団化するようなこと自体がそもそもできない。ですから見守り以外はとてできないという状態ではないかと。今後どうなるかは別にしても、今はそんな現状ではないかという気がします。

○福富部会長

最初のほうはいろいろ議論があると思いますが、最後のほうは、ここを受けたのですが、例えば地域の中で、見守りの大人がいるけれども、ただぼうっと見ているだけじゃないかと。あれはけしからんという声も上がってきているわけです。それ自身ももっと遊びの中に入って行って云々しろという御意見だと受けとめられます。それをここで言ったわけです。ただ見ているだけじゃないと。その裏側にはもっと遊びをきちんと指導しろと。

○委員

大人主導でやれよということになりかねないという、そういう意味ですね。

○福富部会長

そこを言いたかったんです。

○委員

今の意見だとか、そのものを受けて進めていくとするとそういうことが起こりかねないと。

○福富部会長

だから、それで2番目でもっと地域に発信しましょうということにつなげたかったのです。最初のことについては、これはいろいろ御意見がおありだろうと思います。他にありますか。

○委員

一番最後の段落のところで、安全があらかじめ確保された場で何々って、こういうことでは能力は育たないというふうに、かなり厳しく言っていて、その後を読んでいくとそこまでネガティブに言っているわけじゃなくて、子どもたち自身が自分たちの安全を仲間うちできちんと、しかも遊びのルールとか内容に関して考えるということが大事だときちんと言っていますが、ここに敏感に反応して、あらかじめ安全が確保されていると能力が育たないと理解してしまう方もいるのかなと思ひまして、その辺が心配です。

○委員

行政の自由裁量の幅という段落で地域側という表現を使っていますよね。ところが提言2以下のところに地域住民だの地域区民だのというのが出てくるわけです。ですから、この表現ではなく、後ろとの関連で地域住民というように、表現を統一してほしい。

○委員

一つのキーワードとして、「自ら安全を創造する努力や工夫をする能力」というのがありますね。遊びの中で子どもたちはそういった能力を身につける、その自ら安全を創造する努力や工夫を主にすることが出てきますね。私がひっかかるのが、安全を創造する努力、何で安全を創造するのか。むしろ遊びというのは危険がいっぱいあるので、危険な因子からいかに子どもたちはそれを回避していくか。私はむしろ危険を回避する努力といったほうが、遊びというのは、自然とかそういった環境の中でさまざまな危険因子に囲まれているので、そういった危険を回避する能力という、一種のサバイバル的な能力を子どもたちが遊びを通して身につけるといったほうが、何かしっくりくるかなと思います。

○福富部会長

これは表現の問題ですね。それは少しこれから検討したらいいと思いますが、最初に提起があった部分。これは子ども総合センター所長からもある意味では共通な認識ですね。

○子ども総合センター所長

私は児童館、学童クラブ、放課後子どもひろばの所管をしています。だから現場をしっかりと把握する立場です。提言については、それぞれ皆さんからお感じになったことをしっかりといただくということですが、提言の中身で事実的に記載されている部分、例えば今御指摘いただいた「その結果、これらの2つの居場所は、遊びがかなり構造化され、非常に管理されている状況となった。」。このような表現というのは現状がこうだと、皆さんにそう見えてしまっているということでしょうが、遊びがある程度構造化はされているのかなと、ただかなりとまで言えるのかなということと、あと非常に管理されている、児童館と学童クラブというのは子どもたちが非常に管理されている状況なのかということ、ちょっとニュアンスが違うかなという感覚を持っています。

例えば、御指摘いただいているように、子どもたちが全てのことによって本当に丸々自由に遊べ

ている状況かといいますと、それはここにも触れられていますが、ある程度狭い空間の中で様々な学年の子どもたちが来るわけですから、みんなが自由に遊ぶのは、なかなかできない。ある程度子どもたちと話し合いながら、一定のルールをつくっていく作業はしていますし、繰り返されていることです。ただ一方で、みんながここに来たら集団遊びをしなきゃいけないということでは全くなくて、自由に、例えば図書室で本を読むとか、漫画を読むとか、そういうことが当然ながら許されている。自由に本を読めることを許されている場所が、そんなに管理されている状況と言えるのかというようなことを総体的に見たときに、そこまで言っていたかなくてもいいかなというのが率直な感想です。

あと、「何か事あるたびにルール変更や禁止ということで安全を保つ」ですが、私どもとしてはできるだけ禁止をしたくないから、工夫してルールをつくって、だから一輪車を禁止にするのではなくて、一輪車を楽しみにしている子もいるし、その子どもたちがやりたい、乗りたい、それを実現してあげたいけれども、一輪車は自由にどこでもやっていいか、いつの時間でもやっていいかとなると、それが非常に難しいのでルールを子どもたちと話し合いながら、つくりながら、できるだけ禁止しないようにやっているという努力をしています。

○福富部会長

今伺ったことは、全くごもつともだと思えます。ただここで申し上げたかったことは、例えば遊びというのは何なのかということにも関わりますが、そこに行くと、こんな遊びができる、こんなにメニューがたくさん用意されているわけです。そのメニューの中で遊ぶことができるという状況だと思います。そのメニューそのものづくりをするというような余地は、ある意味では許されてはいるだろうけれども、そこが実は欠けているのではないかと、いうことを指摘したかったのです。

だから、メニューづくりの中においては、それは安全であるし、管理という言葉が悪ければ違う言葉を使って、要するに大人の配慮です。大人側の、これは本当に100%善意による、子どものためを思った配慮が徹底している。そうすると、そういう状況の中では子どもたちは遊べるけれども、実は遊びを自ら作り出したり、メニューそのものをつくるという能力というものがいつの間にか欠けてしまっているのではないだろうか。

だから、全部整えられた状況では子どもたちは動けるけれども、それがなくなったとき、あるいは自ら作らなければいけない、それが実は大人になってからひきこもりとか何かにつながる一つの対応、社会というのは、ある意味では厳しいだろうと思えます。そこまで考えたときに、やってはいけないのではなくて、それ以外の視点ももう少し作ったほうがいいのではないのかということの文章だったのです。

だから、言葉一個一個をとってみると、非常にひっかかる個所はあると思えます。ひっかかっていただいたということはすごく大成功で、これを素直に読み飛ばされるのではなくて、

いや違う、自分たちはそんな悪意でやっていないということは当然です。でもそれは悪意とか何とかではなくて、まさに100%善意だけれども、じゃ、これを以前に気がついていたらかという、実は見逃していた部分があったのではないのかとお読みいただければいい。

○委員

実際に集団遊びがうまく運営されているところというのは、その時々で集団遊びのメンバーが違います。例えば小学1年生が多い場合に、昨日のルールと同じだと1年生が潰れてしまうということは普通に起きます。だから、きちんと運営されているときには、大きい子たちがそういうのを分かっている、今日のルールはこうしようという提案をして変えていくことは随時行われていますし、そうでないと横割りの遊びしか多分できません。

そういうところで私たちは集団遊びの大切さをずっと、この場ではありませんが、区と話をしています。そういう中で、子どもはルールづくりをして相手を受け入れ、みんなが遊べるにはどうしたらいいかと頭を使って遊ぶことになると思います。

イベントみたいな感じでどこかの人が来て、こうやって遊びましょうという場合には、一過性なので、決められたもので完全にやるということはあるかもしれませんが、児童館の遊びのバリエーションというのは多分児童館によって違うと思います。

○福富部会長

申し上げたかったことは、空間そのものに逆に決められてしまっているわけですよ。それを取り払ったときに子どもは遊べるんです。僕にはそういう経験がものすごくあります。

以前、子どもたちを合宿で軽井沢に連れて行ったときに、何も無い野原でさあ遊べ、自由に遊べと言ったら、子どもは遊べなかった、縮こまっちゃって。そこは何なのかというと、普段は本当に自由に集団遊びでいろいろなことを遊べる子どもたちが、空間がなくなったときに身動きできなくなってしまう。

何か我々がやってきたことが、そのこのところを育むようなことが少し欠けていたのではないかと、すごく反省した経験があります。だから、普段やっていることが良い悪いということではなくて、そこはあくまでも児童館とか何かという場という、そこが設定されている。そういう状況があったときに、さあ遊びなさいというと子どもは自由に遊べるけれども、そこを取り払ったときに、さあどうしたらいいのかと。それが意味では生きる力に結びつくのではないかと。社会というのはそこじゃないかと思っています。

だから、今の意味で申し上げたいのですが、例えば子どもは叱るよりも褒めなさいということです。確かに叱ることに対するデメリットはたくさんあります。その最高の例は体罰問題ですよ。ところがそういう状況に育ってきた子どもたちが、社会に出て、叱られる場がないのかというと、ものすごくあるわけですよ。そのときに潰れてしまう。叱られる経験がないわけです。逆にフラストレーションすらない状況を、全て作ってしまうことが本当によい

のかということをお願いしたかったんです。

○委員

そういう意味では非常によくわかります。例えばキャンプとかに連れていった場合に、みんな掃除しようといったときに、これは俺が出したんじゃない、という子は必ずいます。だけどみんなできれいにしているのだからやいなさいと私は言う。ご飯はどうやって、自分が全部つくっているのかと、自分で全部やっているのならそういうことを言ってもいいけれど、みんなの協力でご飯を食べているのだから、やいなさいと命令します。いつもそういう役なので。だから、みんなで守るのは理屈抜きでとにかく守るしかないということ、どこかで言わないと、そうなるによく固まると言いますが、だけどそういうフリーズする経験もない子というのは、やはり人の言うことを聞きません。それは本当に思いますね。

あともう一つ、自分の子の話ですが、小学3年生で学童クラブが終わって4、5、6年生になっても放課後子どもひろばにずっと行っていました。そこで学童クラブ出身の子たちを中心に、小学1年生からずっと上の子までみんな集めて、集団遊び、といっても限られますが、そこでわいわいみんなで遊ぶ。例えば鬼ごっこやドッジボールをやるときもあるし、いろいろなバリエーションで遊ぶ。そうするとそのときには、そこに居場所があった。でも中心となっていた子が卒業してしまったら、居場所がなくなった。楽しくないので行かなくなっちゃいました、と一緒に遊んでいた子たちの親から言われたことがあります。学童クラブ育ちでそういうことを知っている子たちが、そこに行ってそういう遊びをつくっているという場合が多分あるという気がしています。

○福富部会長

それに加えてもう少し何かあるのではないのかという提言をしたかったのです。

だから、私は、子どもの発達キャンプ、小学1年生から二十歳まで、同じ子どもたちと1週間ぐらいやっていて、そのキャンプのテーマはそこだったんです。何にもない、決まりがないキャンプでした。だから1日目何をやる、何を遊ぶということはなく、子どもたちが自分でいろいろなメニューの中から自分で遊ぶ。自分の行動は自分で決めようということで、朝起きるのも、自由時間、起きたければ起きなさい、寝ていたい人はいつでもいい、夜何時に寝ることも自由。そんなキャンプをやったときに、自然発生的に朝起きる時間を決めようよ、朝御飯を決めようよという決まりが作られていく。その中で学んだことは、やっぱり大人が全てよかれと思って用意してしまうことはいいけれども、そうではないやり方もあるなということでした。

このところをもう一回、この提言のテーマなものですから、戻って議論したいと思います。提言2に進みたいと思います。

提言2、区民への周知の充実・教科、そして地域への発信。これは地域への発信、先ほど

委員からありました地域住民へでもいいかもしれない。ここでは地域にしておいて。

「放課後子どもひろばを、子どもの生きる力を育むための機能的な場所とするためには、機能そのものの工夫と同時に、保護者や地域住民の協力と理解が欠かせない。

そこで先ず、区は、児童館、学童クラブ、そして放課後子どもひろばの本来の目的や意義について、もっと地域住民に対して周知徹底を図る必要がある。

放課後子どもひろばは、遊びと学びの空間である。区は、見守りという形で、安全管理をきちんと整えながら、子どもたちへの遊びの場を提供している。しかし、放課後子どもひろばの目的や役割について、保護者の中には、理解も十分でない方もいる。児童館や学童クラブと同一視したり、管理責任面で小学校が事業の実施主体と思われる場合もある。

放課後子どもひろばに、子どもの「生きる力」を育む場としてもっと機能的な役割を求めるならば、児童館や学童クラブとの比較も含め、そのあるべき姿について、区民、保護者への周知の充実・強化を粘り強く図っていく必要がある。

さらに、「自由」と「安全・管理」とのせめぎあいをどうしていったらいいのかについて、地域住民に対して発信し、議論してお互いに共通認識をもつ必要がある。行政として、一方的に子どもたちの居場所の機能を充実しても、それだけでは子どもの「生きる力」は育まれない。地域住民の理解は必要不可欠である。

子どもたちは、放課後子どもひろばで遊んだ後は、当然に、地域、そして家庭に帰る。帰った後には、今度は、地域で安全をどう担保し、確保していけるかということになる。

区は、地域住民に対して積極的な情報提供を行うことはもちろんであるが、同時に、地域と一緒に「子どもたちがどう育っていくことが大事であるか」について、お互いの共通認識の下、考えていかなければならない。子どもの「生きる力」を育むために、地域全体を、子どもたちにとって、安全で安心な居場所でありながら、遊びが広がる空間かつ豊かに生活できる場所となっていくことが望ましい。

こうした課題の達成に向けて、行政と地域住民との「話し合い」や「シンポジウム」の場を設けることも有効であろう。状況に応じて、そうした場へ子どもたちの参加も考えられる。」

ということで、何か地域住民と言ったり区民と言ったりまちまちで、これは後ほど統一したほうがいいと思います。

どうでしょうか。何か大言壮語で中身が余りないような提言かもしれませんが、よろしいですか。じゃ次、後でもう一回戻りたいと思います。

提言3です。「自立した若者」を育てるためのきっかけづくり。

「私たちは、行政、地域、保護者を含めて大人として、どのような子どもたちを育てようとしているのか、また、問題が生じたとき、乗り越えられる子どもたちをどう育てるかを考える必要がある。さらに、どのようにしたら「自立した若者」を育てていけるかを考えなければな

らない。

人間は、人との関わりの中で成長していく。しかし、問題を抱える若者の多くは、社会性、対人関係、スキル」、これちょっとおかしいですね。社会的なスキル、対人関係的なスキルという意味です。「などが欠落していると思われる。それらは、子どもの頃からの人との関わりの中で培われるものである。それらが欠除すれば、就労もできず自立もできない。そういう意味でも、人との関わりは極めて重要である。その際に、自分とは異なった人々、異年齢、異世代、異文化の人々と関わることの果たす役割は大きい。特に新宿区では、異文化の人々と関わる機会に恵まれているのも大きな特色となる。

子どもの頃から多様な人々と関わることは、その人が自分自身を見つめる機会となり、ひいてはアイデンティティの確立に結びつきうる重要な機能を持つ。さらに人間としての幅も広がり、自主性も育ち、社会性の発達も期待できる。

例えば、放課後子どもひろばでの異年齢集団が入り混じった遊びの展開とそれに先立つ子どもたちによるルールの取り決め、地域の大人の参加による伝承遊びなどの遊びの範囲（種類）の拡大などが考えられる。

さらに異学年との交流を拡大させて、中学年を加えて、中学生と小学生の間で、活動だけではなく定期的に「遊び」などをテーマにした話し合いの場を設けることも有効であろう。

こうした場の中に、新宿区の特徴でもある異文化の子どもたちの参加が得られれば、多様な人々とのかかわりが持つ「自立した若者」の育成に向けての効果はさらに増すと思われる。

区では、現在、「将来の社会人」である中学生に対して、望ましい社会性や勤労観・職業観を育成することを目的とした職場体験事業を行っており、実績を挙げている。こうした体験事業をさらに拡大・発展させることも、困難を有する大人の抱える内面の問題に対する、予防的な対応になりうると思われる。」というところが提言3です。

ここで少し具体的な内容が触れられております。

○委員

この提言3のポイントは、第2段落でもそうですが、異年齢、異世代、異文化というこの3つの言葉を下の段落にも当てはめて使っていくのが、私はわかりやすい表現だと思います。例えば多様な人々と関わることという第3段落、これはあえて異世代としなかったのは、わかりやすく表現するために、多様な人々とあって、これを例えば子どものころから異世代の人々と関わることというふうにするとか。

それからあと、その下の段落で放課後子どもひろばでの異学年集団とでている。ここも異年齢集団ということで、その上の異年齢、異世代、異文化というのがまとまっていくかなと思います。これも後で検討していただければ。

○福富部会長

そうですね。文言的に整理が必要ですね。

○委員

文言が非常に、内容とともによくわかってきたかなというふうに感じています。

○福富部会長

よろしいですか。一応最後まで読んで、議論したいと思います。「おわりに」です。

「今年度の部会では、若者が困難を有する前の予防的な支援策について、子どもの居場所のうち、小学生の居場所となる放課後子どもひろばについて焦点化をはかって検討してきた。

テーマに基づき議論を進めるなかでは、子どもたちをめぐる環境が多様化していることから生じる様々な問題があり、部会員からも、保護者のあり方、学校の問題、いじめ問題、メディアについてなど、様々な問題の提起があった。

それぞれの問題は複雑に絡み合っており、子どもたちが「自立した若者」になるための「生きる力」をどうやって育んだらいいかという根本的な解決に至る妙案については、残念ながら見出せなかった。しかし、『問題の提起を通じて、社会のあり方そのものを見直す議論も、また必要である』との部会員の意見の一致もみた。

次年度からは、次期「次世代育成支援計画」策定も始まることから、その中でより深めた検討がなされることを期待する。」というところです。

ここは、今回で全て終わりではなく、継続してほしいということです。

それでは、もう一回戻りまして、先ほどの問題です。先ほども出ましたが、こういう提言でそこまで言い切っているのかということも含めて、委員や子ども総合センター所長のお考えも私は必要だと思うし、もっともなところもあります。どうでしょうか。もう一度提言1に戻ってみたいと思います。

○委員

このことを提言することは、今までの部会でもかなり出ていたところで、つまり、あまりにも用意された活動という中での遊びということ。

非常に管理されているという表現は、少し考えたほうがいいだろうと思いますが、こういう状態になるのが、小学生になってからの問題ではなく、就学前の場においても、一方では幼稚園や保育所や認定こども園などが整備されることは重要なのですが、やはり本当に幼い時から大人が作った色々な環境の中で子どもたちが生活せざるを得ない。そういう中で福富先生がおっしゃる本当の意味での遊びの体験が、小さい時からもしかしたらほとんどなされずに、遊びと言っているけれども、実は遊びの体験がないというようなことが実は就学前の保育の過程で改めて考えなくてはいけない課題だろうと思います。

そういう意味で、この表現を今すぐどうしたらいいかというのはわかりませんが、やはり小学生になった段階の子どもにとって、本当に自由のある中で、しかも自分たちの、先生が

おっしゃる遊びを創造していく。創造していくという中にはいろいろ大変さも含めて、そういうニュアンスを私は今回のこの提言で、少し実際に今ここにかかわっている方の御苦勞だとか、それからそうせざるを得ない状況等を考えたときに、配慮しつつ、今ここで大人がそこに気づかないと、負の連鎖という言い方を強く出し過ぎていいかどうかとも課題だとは思いますが、今やらないと本当に負の連鎖になってしまうというふうに私は思います。

○委員

最後の提言3までで、改めてこの場で子どもたちに自分たちで考えさせるということが、行く行くは自立した若者につながるんだなというのを改めて感じましたが、提言1の中だけですと、子どもの生きる力というところであって、どこかに3につながるような、今、先生がおっしゃられたことも含めて、自分たちで生きていく力を育てるところにもう少し踏み込むとつながるような気がします。

○福富部会長

「生きる力」と何気なく言っていますが、「生きる力」とは何かという疑問は当然出てきます。これには文部科学省の中央教育審議会(以下「中教審」という。)の提言があります。ここで言う「生きる力」の定義を明確にしておこうと思っています。自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力と自らを律しつつ、他人と共に協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性。

○委員

健康に関する、体力の問題が3つ目にこの中教審で出ています。

○福富部会長

これを掲載したほうがいいですね。

○委員

そうですね。生きる力というのはこういう意味で使っているよと。

○福富部会長

それから、先ほど、きつい表現があると、その表現に反応してしまっ、言わんとする中身がなかなか伝わらないということは十分起こり得るので、これは気をつけましょう。

○委員

提言1の3段落目、子どもは自由に遊びたいと言いますよね。でも大人はもっと安全なほうを優先したいと言っているけれども、子どもを自立させるためには、自由に遊びたいというのを優先してあげてもいいのではないかというニュアンス、ここでは保護者の意向を全く無視することはできないとありますが、子どもが遊びたいならその意思も重要なので、そちらを優先してもいいのではないかというニュアンスがあってもいいと思います。当然、保護者としては安全に過ごしてほしいと思うけれども、もっと自由に遊びたいというところに少

し目を向けてあげましょうということもあってもいいかなと感じました。

それが行く行くは自立する若者になるのではないか、きっかけではないかということです。

○福富部会長

ただ、どうでしょう。極端に表現すれば、もっと徹底的に子どもを縛りつけて、がんじがらめにするという手だってあるのかもしれませんが。だからそうすると、社会に出てからもっと厳しい状況においても勝ち抜いていけるという力がつくれるのかな。

これは全体が子どもの自由を少し考えようという流れだから、少し大人に配慮した、そうになっています。あえてここで子どもの自由を強調するとどうでしょうか。

○委員

少し違うところですけど。例えば私たちの話し合いの中で、集団遊びが大事だとたびたびでますよね。そんな乱暴な遊びが大事ですかという保護者からの声もあります。これは非常に難しい。多分その人たちには経験がない。町とか何かで異年齢が集まってわいわいやって、いろんな悪いこともしたと。例えば草原に行って、草を結んで、他人が倒れるのを楽しんでいたとか、穴掘るぐらいのことはしたことが僕はありますけれども、例えばそういう経験が全然ない人たちがいるわけです。

だから、そこで何をどう伝えたらいいかというのは本当に難しい。でもやはり子どもたちが生き生きとみんなでワアワア走り回って、遊んでいるのが楽しそうじゃないかと。楽しいというのを認めるべきじゃないかという話をしてみます。そういう例えば転んだり、多少ぶつかったりはあるかもしれないけれども、そういうのを子どもは基本的に好きははずですよという話しか言えないでいます。

○福富部会長

子どもにとって遊びって何なのですか。

○委員

楽しくなきゃ遊びじゃないですよ。

○福富部会長

楽しいものは全て遊びですか。

○委員

そうですね、ゲームとか遊びと言いたくないですね。カードゲームとかね。

○福富部会長

でも、それはそれでいいのだらうと思います。

○委員

けどやはり、例えばそろそろ集まって、5、6人がそれぞれ別のゲーム機を持って、同じ空間にいるのに全然ばらばらに、ただそこにいるだけみたいな、そういうのを目にする、

児童館でもありますが、悲しくなりますよね。

○福富部会長

私の家でもそうでした。漫画がそろっているのですが、よく子どもも友達を連れて来て本棚の前で2人で読んでいますよ。うちは図書館じゃないから、それを持って行っていいからきょうは2人で遊びなさいと言っても、今の子どもは遊ばないものですね。

○委員

1人でも空想遊びとかできれば、それはそれで一つの遊びですよ。

○福富部会長

遊びですよ。だからひとり遊びもあながち悪いとは思わない。

○委員

児童館でも1年生とかは、よく「ごっこ遊び」といいますが、囲まれた空間を作ってやるとその中でままごとをやっているんですよ。男の子も女の子も一緒になって。そういうのはそれでありだと思います。だけどみんなで走り回ってというのもぜひやってほしいと思います。

○福富部会長

図書館や児童館に行って、今日は静かに1人で本を読んだりしたい子どもは、それなりにそこで遊んでいる。それもいいと思います。だから遊びって何なのだろうね。やはり自分で今何がしたいとか、そういう自発性みたいなものが根底にあることかな。だからそれが今すごく遊ばされている。遊んでいるのではなくて、いろいろな状況で「さあ遊びなさい」といった場が与えられて遊ばされている。

○委員

そういうのも必要だと思います。だから児童館とかに行けばみんなで遊べる。みんなとどうやって遊んだらいいかという方法がわかるというのは、やはり自分は今日はやりたくないけれども、行けば何か遊べるという、集団遊びの遊び方を学ぶ場所としては良い。

○福富部会長

でも児童館は集団遊びの場だというふうに規定してしまうと、これもおかしい。児童館は集団遊びもできるけれども、一人でもいられる。

○委員

そうですね。図書室、音楽室、工作室もある。そういう場でそれぞれ好きな子はずっと絵を描いたり、そういうことを当然やっている。

○福富部会長

それだけじゃ困るだろうけれども。だからいろんなバリエーションがある。

もう一つ訴えたいのは、その子がその日の、あるいはその子の発達の状態というのがある。その中で、今何を自分ができるのか。それを周りは、さあやりなさいとつい口出ししちゃう。

それをどのくらい周りがじっと抑えられるかなということかもしれない。

他にどうでしょうか。

○委員

「生きる力」ということの説明も重要だと思いますが、どうしても自立した若者というのが漠然としたイメージで、自立した若者イコール就労自立ということが「はじめに」も出てきますけれども、経済的な自立がイコール自立した若者かということになってしまうんですね。やっぱり生活者としての、人間としての自立というよりは、経済的な側面的イメージの自立だと少し感じます。自立した若者の自立とは一体何なのか。

○福富部会長

ここで経済的なものを強調し過ぎる。

○委員

就労支援というものが少し出てくる。そうすると経済的な側面での自立性ということ促すというようなニュアンスが否めない。

むしろ生活者としてのスキル、生活者としての生きる力ということでは、要するに中教審の答申にもあるように、小中学校と高校ではいわゆる生きる力を育成することが根底にあって、それがやがて大学、高等教育では学習力につながっていく。そこには一つの連鎖があります。それが一直線であって、いわゆる中教審の言葉を借りれば「21世紀型市民の育成」ということにつながってくるので、ここは「若者の自立」ということをもう少し言葉を添えて、生活者というとその辺は細かく分かりませんが、追加的な文の説明が必要かなと思います。

○福富部会長

分かります。ただ、自立をそこまで広げてしまうと、ものすごくメンタルなこともあり、この委員会の流れとしては「はじめに」で出てくるのが就労自立です。それはこの部会というよりも、その前からの流れの中で、就労自立という特にニートの問題とか、そういう流れでこれまで進めてきたので、メンタルなところなどはつい薄らいでしまったということがあるかもしれない。あえてここでもう一回加えると、流れがすごく拡散してしまいませんか。

だから、ここでは就労的なかなり経済的な自立というところを、あえて問題にしている、狭めるということもあります。どうでしょうか。それで全て解決とは思いませんし、おっしゃるようにメンタルなところがすごく重要だとは思いますが。

○委員

他者との関わりの中で生きる力をつくっていく。他者との関わりということでは、ソーシャル的な側面から考える場合、単なる経済的というよりは社会的な人間関係といった意味合いでの、その中に自分を律する力であるとか、自立には2つありますよね。自らを律する場合と本当に独立する、インディペンデントとありますから、そういう意味である程度言葉の

説明を加えたほうが、地域住民に発信した場合、自立の意味が就労だと思ってしまいますね。

○福富部会長

ただ、以前の部会で、高田馬場にある若者の就労支援現場視察に行ったこともあるので、就労に絞ったということは否めない部分があります。

○委員

ただやはり家庭の中で育ち、そして社会で働く。そういう意識を持つというのは自然なことですよ。そういう意味で別に捉えていい。就労ということで社会に出ていくというふうに、別に捉えられるのだと思います。

今、社会状況、経済状況が悪いし、全体的に働いてもワーキングプアみたいな問題が広がっている。自立とは言えない状態、親がかりということが残ったりしますが、それでもやはり働いて生きていこうとしているというのは、ここで言う支援対象もしくは育てる対象ではないと思いますね。少なくとも働いて自分で生きようとしているところは、社会で。

○福富部会長

就労にあえて絞っても、そんなに問題は起こらないと思います。

○委員

先ほど出た視察の際は、とてもいろいろなことを学ばせていただきました。就労し、仕事を持つということは人間にとって、どういう仕事であっても非常に重要なことで、でもその仕事を持つということは、他者と関わることにあります。先ほどコミュニケーション力が土台になり仕事につくということが大事とありました。そういう意味で就労という言葉で出すけれども、そこを得ていくため、そうしていくためには一つの力になるということであると、こういったものを少し説明の中にあれば決して経済力を持ってという、それだけにはならないというふうに思います。

○福富部会長

だからあのときも感じたことは、就労に困難を持つ若者たちが、結局、人とコミュニケーションをとれていないのです。人と関われないということがすごく浮かび上がってきて、これはすごく大事なことだと。

○委員

提言全体を通して、就労自立というのが、自立した若者イコール就労自立というような、そういうニュアンスを感じますね。でも、自立した若者というのは、先ほどの生きる力と同様に、生きる力とは何ぞやということで追加の語の説明がありますよね。じゃ自立した若者とは何か、自立とは何かと、そこなんです。自立したというと、どうしても経済的な自立というのが前面にイメージとして出てくる場合が多い。やはり生活者としてのというようなニュアンスを取り入れたほうがいい。生活者というのは、もう少し工夫の余地がある。

○委員

例えばどういうことになりますか。

○委員

トータルのな、人間全体的な、一人の人間として生きる力を身につける。それが経済収入を得ることも一つの自立だし、いわゆる家事とか育児とか、地域ボランティアだとか、そういった人間が関わる全てのトータルの意味合いで。

○福富部会長

専業主婦は自立していると思いますけれども。

○委員

私はそれに対して反論していません。ただ、専業主婦の方から見たら、経済的な自立という意味合いで何か捉えてしまっただけなのかなというところがある。

○福富部会長

専業主婦こそ、逆に経済的に自立している人が多いのでは。

○委員

専業主婦は経済的に自立していない状態が多いから問題なわけですよ。やはり色々な意味で縛られていて、家事を押しつけられていることは非常に問題だと思っています。

だけど、例えばこの若者支援という場合に、私の子どもが小学校に上がったときは、学童クラブの子というのはほんの1割から2割しかいなかった。今は6割から7割いますよね。その学校によってももちろん違うと思いますが、新宿ではかなり多い。そういう子どもたちは、実際の状態として、社会に出ていくという意味で、別に就労に向けようとは思えないし、就労自立というのは23年度でそういうテーマを掲げたということだけであって、全体で言っているのは、社会性を持つ、そして仲間との関わりを自分が持つ力を持つ、そういう意味で言っているわけですよ。

○委員

それが就労の自立に結びついていけるような生きる力を身につけるというような、そういう流れで捉えられるというか。

○委員

就労も一つじゃないですか。社会に出るという意味では。

○委員

就労自立という一つの側面に何かつながっていくような流れで受け取られがちなんですよ。

○委員

余りそういうニュアンスにはとれません。むしろ「はじめに」のところそれが強調されているけれども、それは違うというふうに、打ち消しを明確にすればいいのではないでしょ

うか。それだけじゃないと。

○委員

先ほど就労自立の数値のみが注目されて、その数値の改善策・対応策に追われることが少なくないことが指摘されました。さらにその就労自立に至るにはということで、若者の抱える内面の問題を解決に向けていく。就労自立に至るにはというと、就労することが最終的な若者のゴール的な意味合いがちょっと見えてきます。

○福富部会長

就労自立という一つの現象をとったときに、実はそういう問題だけではなくて、本当に色々な内面的な問題、色々な問題があるということに我々は気づいたと。だから就労自立の就労するための数値を上げるとか何とかということだけではなくて、違う意味があると。それがむしろ委員がおっしゃっていることではありませんか。そこを言ったつもりですが。

○委員

自立イコール就労というような意味合いで。

○福富部会長

でもそれは仕方がないことですよ。今までのこの部会の流れの中で、就労自立というものをきっかけに若者の問題を、内面を考えるという話になってきたわけだから。

○委員

ニートとかひきこもり、要するに若者が内面に抱える問題があるからということですね。

○福富部会長

そこから始まったということは事実ですから。それを否定されても困ります。

○委員

実際に話し合ってきた内容はそこだということですからね。

○委員

昨年のテーマはニートとか、いわゆるコミュニケーションの問題でしたから、その流れから考えればもちろん無理はないと思います。ただ、これを一般住民に発信した場合に、発信の徹底、普及とありますが、じゃ自立って何かと、一般的なイメージを皆さんはお持ちだと思います。自立した若者というと、それが具体的にどういうことかと捉えた場合に、生きる力とは何かということと同等に、生きる力という言葉も皆さん漠然としたイメージはお持ちですよ。では自立した若者とはどういうことかと。それが生きる力と自立した若者というのは、やっぱり連鎖していくものですから、そこには一つの語彙の説明があってもしかりと私は言っているのです。

○福富部会長

それならわかります。

○委員

生きる力の説明があるのだったら自立した若者についてあっても良い。

○福富部会長

だから、生きる力というものの脚注をつけるならば、自立した若者というのはここではどう考えるという脚注をつけたほうが良いという御意見ならわかります。

○委員

ただその場合には、男女共同参画的な視点ということもある程度は持ってこないと、自立というのがやっぱり経済的というふうにとられがちな場合が多々ありますので、自立といった場合には一般的には経済的というイメージは皆さん思いつく。

○委員

ぜひ教えていただきたいのは、もし自立した若者というものを定義するとしたら、どんなふうにするか。今の段階での思いというか、それをぜひ教えていただきたい。

○委員

例えば夫婦という一つの単位で考えた場合に、家族として夫婦は単位ですから、やはり家事の役割分担であるとか、それは家事というのは人間として当然根幹的な行為ですし、これは男女が共有化していくということは自然の流れというのは、ジェンダー的な見解でそう思います。ですから、そういった生活の中で、個々の生活の中での自立というような、そういった視点を含めた自立という説明をしたほうが良い。

○福富部会長

でもそういうと逆な反論が来ますよ。それは夫婦主義じゃないかと。結婚を前提としているということ、それをしない立場もあるわけだから。そこはカバーできないですね。

○委員

単身世帯の場合だったら当然それはありますよね。

○福富部会長

だから夫婦という枠の中で考えるという定義をしたとすると、恐らく一般区民からはそれは夫婦だけの話で、では結婚しなければいけないのかというような反論は当然来るだろうし、まさにジェンダーの問題からもそれは偏っているのではないのでしょうか。

○委員

それは夫婦のみの世帯ばかりではないですから。単身世帯が多いと思いますので。

○委員

多いですね。

○委員

単身世帯の方はどうかというと、当然経済的な収入も得る手段を持ちながら自ら食事や買

い物とか、いわゆる自分の生活者としての自立を持たれていると思います。

○委員

自立というかやらざるを得ないというだけじゃないですか。

○福富部会長

それは経済的に生活の自立をするための、ある程度の経済力というのはどこかで得なければいけないわけでしょう。そこはどう考えるのですか。生活者としての自立という場合に、その生活する上でお金をどこで稼ぐのですか。

○委員

それは色々あって、高齢者の方から言わせれば年金だけで生活している。

○福富部会長

だから、先ほどから経済力を強調するということがジェンダーに反するんだということを何回か言われているけれども、それはおかしい。経済性を強調するということは反ジェンダーですか。そうじゃないと思います。まさに生活そのものですよ。そうではないでしょうか。

○委員

もう少し言うと、例えば主婦の方たちは、主婦労働をやっていて本来は自立しているべきだし、その人たちも自覚すべきだと。意識を持って自立的に自分の貢献していることもきちんと認識してやるべきだというのは、私も賛成です。

ただ実際は、例えば小学校とか中学校のPTAをやるとよく分かりますが、主婦の方と話しても全く根底が違います。例えば私たちは、働いているのでメーリングリストで連絡をとりたいと言います。そうするとどういうふうに戻ってくるかということ、主人に相談してからということなんです。夫に相談したらウイルスもあるかもしれないし、難しいからやめたほうがいいと言われて、実は連絡がとれないということがよくあります。学童クラブの保護者だったら何の問題もなく絶対メールでやりましようとなりますが、そんな現状が実はあるんです。これは逆説的な言い方ですよ。例えばこういうふうなことを言って、じゃ主婦の方がそんな誤解をするかということ、私は絶対にはないと思いますよ。

○福富部会長

僕もないと思います。

○委員

例えば、女性で子どもを抱えながら学童クラブに行っている方は、本当に3割から4割いますよ。物凄く増えています。だからそういう方たちに対する何か差別的なものがあっても、ここには全然そんなことはないと思いますよ。

○委員

いや、そこまで細かい文言を挿入すべきとは言っていません。昨年からの流れから考えて、

そんな文言を入れることは要求していません。ただ、追加的な語彙の説明の中には、就労と
というような文言だけではなくて、広い視点からの自立ということで説明を最後に加えたほう
がいいのかなというふうに思うわけです。

○委員

今回言う自立というの、小学生を見たら自分は頑張ってるのが自立だし、だ
けど大人から見たらまだまだ擁護が必要だという、その人の見方によって自立って変わって
くる。そういう幅広い見方をしたときの自立のように捉えてくださいというみたいに、そう
すればボランティアでも働いていないとは私は思っていないんです。やはりボランティアだ
ってちゃんと仕事だと思っているから、無償であってもやっぱりミスをしたら迷惑がかかる
人がいるというふうに思っているし。

○福富部会長

ボランティアだって、それだけで生活はできないわけですよ。ある意味では経済的な基盤
があって、その上であるいはボランティアからの収入もあるかもしれません。

自立した大人、自立した若者を定義するのは、至難の業というか難しい。

○委員

経済的な自立イコール、だから私はそれが一人の独立した人間かということで、私はそれ
には異論を唱える。

○福富部会長

イコールということは言っていない。

○委員

先ほども申しましたように、専業主婦といえども、それは経済的に見れば無償であっても、
アンペイドワークであってもそれは立派な家事労働ですよ。それはシャドウワークとして立
派に評価されるべき問題ですよ。

○福富部会長

もちろんそうですよ。

○委員

自立とは経済的な自立が本当の自立なんだというふうに捉える方も中にはいらっしゃるわ
けです。だからそういう方々に誤解を招かないような自立ということ、もっと広い意味で
追加説明されたほうがいいのかなという、一つの提案として申しました。

○委員

ただそこまで広げると、例えば子どもを殴って育てないからろくな子どもが育たないと言
っている人もいないですか、現実に。そういう持論を持つ人にも配慮した言い方だど
かに広がってってしまうのではないですか。

言いたいことは読めばそれは違うと分かる。もっと安全を管理すべきだという意見の女性のほうが多分多いと思いますが、そういう声が多く聞こえてきそうですけれども、ただそうじゃなくて成長を促すためにはそういうものが必要だというふうに、トータルで言っているわけで、余りそこに違和感はないですね。その辺は何でだめですか。

○委員

要するに、生きる力とは何ぞやということで、それは将来的には若者の自立ということに結びつくわけですよ。それは文部科学省も唱えているわけですから。その一つの流れに沿って考えるならば、若者の自立ということの一つの高等教育で言えば学士力なんです。

○委員

どんな意味ですか。

○委員

文学士とか法学士とか学士。

○委員

大学を出たという意味の学士ですか。

○委員

ええ。生きる力と学士力が結びついていくという一つの流れがあるわけですよ、文部科学省の。私は別に支持するものではないですが。

○福富部会長

きちっと大学を出ないと自立しないということですか。学士というのは大学でしょう。

○委員

いや、ただ高等教育の進学率を考えたら5割を超えているわけですから。

○福富部会長

逆にたかだか5割じゃないですか。

○委員

たかだか5割ですけれども、非常に増えてきているし、別に高等教育を受けない人が悪いということではありませんが。

○福富部会長

学士力という言葉こそ問題ですよ。逆に言うと。

○委員

学士力を前面に出すということではなくて、経済的という中、一つの側面の中で私はそれが見えてきてしまう。そうではなくてもっと広い社会的責任能力であるとかですね。

○福富部会長

経済力ということは本来どこも使っていないですね。就労という言葉であって、要するに仕

事をしまししょうと。社会に出るためにはやっぱり何らかの仕事をするということは、これもだめですかね。仕事イコール経済ですか。

○委員

いや、そうは思いません。

○委員

正規雇用とも書いていないでしょう。だから就労だけですね。

○委員

私は別に正規雇用とか言っていないくて。

○福富部会長

経済という言葉は使っていません。

○委員

経済は使っていない、ただ就労ですよ。だから、就労というと経済的な自立というような意味合いで。就労というとやっぱり仕事に、いろんな正規雇用もありますが。

○福富部会長

それだけじゃないでしょう。就労するということ自身が社会に出るということですよ。生活の自立をしまししょうということですよ。それが普通の常識じゃないですか。世間で言う。就労するということは。

○委員

でも就労というと、やっぱり労働につくということですから、労働をするということが例えば一般的な企業で働くとか。

○福富部会長

そんなことはないですよ。それこそ、高田馬場に視察行ったときに、一般企業とか何か考えていませんでしたよ。就労支援で実際やっている人というのは。本当にごみを何とかするとか、そういうところから始めましようということですよ。それが就労ですよ。むしろ就労イコール一般企業に云々するというのは非常に偏った見方です。

○委員

だから、一般的に偏った見方をする地域住民にいるかもしれない。就労と言った場合に。

○福富部会長

就労という言葉からそこまで考えるという人は極めて少ないと思うし、それらは無視すべきですよ。こういう提言をするときに、そこまで気を使って云々するというのはできない。

○委員

何度も申しますが、自立ということの説明というのがある程度加えられたほうが。私もこれがベストという表記の仕方はわからないですれども。

○福富部会長

社会に出て人に対することですか。

○委員

就労というときに確かに就労イコール、どういう組織かはわからないけれども、働くことによってその対価を得るといふふうに捉えるだろうということですよ。でも一方で、働くということは労働をしても対価を得ない無償のものがある。そこにも意味は、価値があるだろうということですよ。

むしろ自立とは、と言うともものすごく大変なことになるので、就労というところに、いわゆる働くことによって対価を得るといふことだけではなく、今のようなこと、それがうまく説明できるかどうか大変ですけども、むしろその辺の説明をして、私も訪問させていただいて、ものすごく心を動かされたのは、それまで大学も出たんでしたよね、ですけども、自分が社会で生かされる、自分が社会の中で役に立ったという、そういう自己効力感というものも持てない人がそのごみ集めだとか、そうしたことに参加することによって、本当に生き生きと自ら語っていらっしゃるわけですね。そういう姿に触れたときに、やはり自分が社会の中で何か労働というか働くことによって、それが役に立つという、これがものすごく重要だと思いますね。主婦もそうですよね。やっぱり家族にとってそれが役に立ち、立派な労働として認められるということだと思います。

ですので、就労という言葉抜いてしまうと、本当に今までの流れからにおいては意味がなくなってしまう。ただ、その就労とは何か説明ができたらいいなと。

○福富部会長

あえて弁明すれば、就労自立にかぎ括弧をつけた。これはその意味で、特別な意味があるということです。それは今までのこの部会が引きずってきた歴史の中での就労の問題だということ強調したかったのですが。だから就労するということは、何も企業に勤めたりするということだけではなく、働くということ、社会のために役に立つことをするという、役に立たなくてもいいだろう。何かするという。そこすらできない若者がまさにいる。

○委員

社会との関わりの中で自分は生きている。そして何らかの形で社会に私は貢献するんだと。

○福富部会長

それが就労ですよ。

○委員

つながりとか関係性とか、例えばそういう言葉を少し含めて、受けとめる……。

○福富部会長

だから関わりとか、そういう言葉を散りばめているんです。必要以上に関わりという言葉

を言ったつもりです。

○委員

自立という、生きる力と併記する形で、最後に社会との関わりの中での自己肯定感・充実感であるとか、そういったニュアンスを含めた説明が若干あったほうが、生きる力と就労自立なり若者の自立というのが、最終的につながっていくというような受け取り方として発信すると、地域住民としては、こういうふうに生きる力というのは子どものころから養って、最終的にはこういう生きる力を若者の社会的なつながりという、こういう形につながっていくというような、そういった強い発信力につながってくると思うわけです。

ですから、生きる力があるのだったら自立した若者の表記もあってしかりかなと思います。

○福富部会長

もし表記するとすれば、自立とはということの注釈になると思いますが、難しいです。

○委員

社会的な関わりが散りばめてあることはわかりますが、読み直していく中で、じゃ最終的に自立した若者って何なのかなというふうに、最終的に確認する意味でも生きる力と併記したほうが、社会との関わりの中でそういった自分は生きているというような自己充実肯定感みたいなものを得るということも、自立なのだと伝わってくると思います。

○委員

ただ、若者に対する呼びかけの文章ではないですよ。だから、そのきっかけづくりとしてどこから始めるかという意味で引用しているだけであって、例えば将来の社会人、括弧つきのだって、これは何だと言われれば、そんなものは議論百出でまとまるわけもない。けどいわゆる将来の社会人という意味で使っているわけです。だから、ある程度多くの人たちにこんなものというイメージがあるだろうという言葉を使っているわけで、それは自立した若者だって同じようなところがあるのではないですか。だって、人によって自立だっていったら何を指すのかというのは、これまた物凄く難しいのではないですか。

○福富部会長

難しいな。さっき言った自己効力感とか、非常に限られた見方になってしまいますね。ある意味では功利主義でしょう、自己効力感、まさにセルフエフィカシーとか、そういうところで自立を定義すると、僕は逆に反対ですね。自立はもっとモヤっとしているところがあっていいのだからけれども、そういう形で定義してしまうと、逆にぎくしゃくしますよ。

まさにセルフエフィカシーみたいなものをそこに持ってきたり、自己充実感、今さらまぜるわけでもないよということになって、それはかえって本質からどんどん離れていく。それは、言葉の遊びですよ。

○委員

マズローのそういった表現はもちろん一般の方はわからないので、例えばソーシャルクオシエントということは昔から言われていて、それはエモーショナルクオシエントという、いわゆる情動指数であるとか、社会的な関係能力であるとか、そういう社会的な他者との関わる力、他者と関わっていく力、人間関係のいわば一種の構築能力みたいなことも、自立の一つの要素なわけですよ。

○福富部会長

だからそこを言っているわけですよ、ここで。社会的な関係、人間関係のスキルだとか、社会性のスキルということをやっているのです。まさにおっしゃることは全部うたっているはずですよ。そこを見ていただかなくて就労だけ捉えられて言われても、じゃ自立をどう定義されるのか、具体に出されるならわかります。自立について、2、3行で書けと言われても私はできない。しかも万人に理解されるような自立論というのは難しいのではないですか。

○委員

文部科学省の定義ですよ。じゃ自立ということも何らかの文部科学省の定義か何かを、例えば一例としてあるならば、そういった文言も併記したほうがいいのかと思いますね。

○福富部会長

自立について見たことありますか。中教審とか。今までの一連の流れを踏まえて。

○事務局

この「生きる力」というのは、先ほど福富先生が御説明したように、中教審でこういうような定義づけが出ていて、我々が議論してきた内容が十分に反映されているだろうから、このまま場合によっては引用してもいいだろうとなったわけです。

ただ、自立というのは、これまでのお話のように、非常に限定的な内容になってしまうのではないかと。せっかくこれまで皆様方は、視野の広いいろんな角度から議論されてきた。そして提言については、予防的のところから書いている内容なので、そういう意味では先生がおっしゃられているように、変な定義づけはしないほうがいいのではないかとに思います。

そして、委員が発言されている内容は、ほとんどこの中に反映されていると思っています。

就労の指数が上がればいいのか、違う。もっとほかに大事なものがあるでしょうと。逆に言うとその手前にそれをやらなければ、たとえ一時就労したとしてもすぐやめてしまうよと。それでは本当の自立にならないという観点から、人として小さいころから生きる力をまさに育てていって、困難に直面したときに自分で解決して生き抜いていく力を身につけていく、それがひいては若者の自立だし人の自立につながるのではないかと。そのために、大きくなって社会生活を円滑に営むのに困難を有する状態にならないためには、事前にやっておいたほうがいいだろうということで、今回焦点を絞ってやっていったわけですよ。

そのためには、直接的に就学前のところから本当はやらなければいけない。ただ、子ども

家庭部所管ということで、児童館、学童クラブ、放課後子どもひろばという、とりあえず今回は3つに絞って、現場も見ていただきました。さらにその中で、まだ一定の工夫が入れられそうな放課後子どもひろばについて、4回の部会で議論いただいてきました。

御指摘のように確かに就労自立ということは、はじめにも出ています。これはむしろ逆説的に書いてありますよね。内容をどんどん読んでいくと社会性を身につけることが極めて重要だとか、他者とかかわることで子どもは成長し社会性を身につけていくだとか、まさに異年齢、異学年、異文化、こういった関わりをすることによって、自己を見つめ直し他者への思いやりなども身につきますよ。まさに委員がおっしゃっている他者への配慮、社会性、コミュニケーション能力、具体的にコミュニケーションと書いていませんけれども、そういうような要素を全部含めた上で自立していつてもらいたいと。

それはこの文章を読んでいただいて、もやもやと若者の自立とはこういうことだなというのを、読者にわかってもらったほうがいいのかなと。それぞれの捉え方もあるでしょうし、ましてやジェンダーの問題も、ここの中では差別は一切ありません。もちろん確かに就労自立、お金をもらって自分で経済的に独立するということは極めて大事ですけれども、それも一つの部分ですね。大事で大きいけれども、一つであって、それで社会性が身につけなかつたら結局壊れるわけですから。全部そろった上で最終的にはそうだろう。だけど専業主婦の方もちゃんと立派に自立している。夫婦の社会の中できちり話がつけられる能力があれば、自立しているということが言えるのではないかと思います。

恐縮ですが、表現の修正に関しては、現場の責任者の意向もありますので、申しわけありませんが、少しトーンダウンさせていただく方向で調整させてください。

○福富部会長

先ほど委員とのやりとりでもそれはあったし、いいですよ。そのくらいのトーンダウンで。あとはそこで子ども総合センター所長が納得できれば。

○事務局

「生きる力」の定義づけですが、場所としては2ページ目の下に入れさせていただくことで、本論が4ページから始まる、提言1が始まるその手前の現状と課題、それよりさらに前に入れればよろしいかなと思っています。

そして、今回御議論いただいているテーマについては、「生きる力を育てる子どもの居場所の機能の充実～自立した若者の育成のために～」ですが、その自立した若者の育成のためにという文言に落ち着く前に、実は、子ども・若者育成支援推進法で、「困難を有する若者」という言葉があって、今回のテーマを決める際に、「困難を有する若者にならないために」というのを、ここにまず入れたところ、どうも落ち着きが悪かった。そこで、「困難を有する若者」を裏返して「自立した若者」にしてみたという経緯があります。要するに「困難

を有する若者」でない若者なのです。だから、自立した若者を定義づけするのではなくて、「困難を有していない若者」がいわゆる「自立した若者」ということになるのではないかと
いうところなのです。

法で、社会的に若者を支援する協議会を、市区町村についてもつくりなさいというのが前提にあって、自立した若者を議論するのではなくて、困難を有する若者にならない、その施策をどうしたらいいかという視点があったことをつけ加えさせていただきます。

○福富部会長

そういう意味でいうと、この部会からこの発信があれば、子ども・若者育成支援推進法に全く則った活動なんだということですね。

○委員

少しいいですか。自立した若者というのと困難を有する若者に対する、例えば予防的な対応になり得ると、提言3の一番下にあります。いわゆるプラス思考の方向のものと、マイナス的な表現のところが入り混じっているので、ひっかかるんです。だから新宿的には自立した若者を育てると言っているんだから、やっぱり法律としてはそうであったとしても、私たちの提言としてはそういうふうに統一したほうがいいのかなという気がします。

○福富部会長

あくまでも予防的なというんだからネガティブではない。

○委員

事務局からの説明もありましたが、あとは余りそこを突き詰めていくとどんどん広がりが出てきて拡散してしまう危険性が確かにあるので、私たちが話し合ってきた流れから考えれば、困難を有さないというか、困難を抱えない若者が、逆説的にそれが自立した若者と捉えたほうがしっくりすると思いますので、先ほど私の発言はそれはまた別の会で議論したい。

○福富部会長

ただちょっとニュアンスが違う。困難を抱えた若者にならないためにと、困難を抱えない若者にするためにとは違うと思うんですよ。

○委員

確かにそうですね。

○福富部会長

今日はかなり突っ込んだ議論をしていただきまして、大体大筋お認めいただいたということで、今日の御意見を踏まえて文書のやりとりで皆さんにはお願いしたいと思います。

午後4時00分閉会